

資料

シンポジウム記録
「関西の放送ジャーナリズムに何が可能か」

黒 田 勇 ・ 荒 木 亜里幸

Symposium, “What Can TV Journalism in the Kansai Region do ?”

KURODA Isamu, ARAKI Arisa

Abstract

This is a record of a symposium which was held in Kansai University on the 28th of October in 2006, in which four TV journalists discussed how they can and should work for public in the Kansai region.

Keyword: TV Journalism, Local station, Local identity

抄 録

この資料は、2006年10月28日に関西大学で開催されたシンポジウムの記録である。

このシンポジウムでは、在阪民放4局の報道担当者が、関西の地域放送局の放送ジャーナリストとして、地域のために何をすべきなのか、何が可能なのかを議論している。

キーワード：TVジャーナリズム、地球局、ローカル・アイデンティティ

はじめに

2006年10月28日（土）に関西大学社会学部（第三学舎ソシオAVホール）において開催されたシンポジウム「関西の放送ジャーナリズムに何が可能か—阪神大震災からJR尼崎事故まで—」の筆記録である。パネリストとして参加したのは、在阪民放4局の報道部関係者、毎日放送・沢田隆三氏、朝日放送・安田武史氏、関西テレビ・橋本崇氏、読売テレビ・春川正明氏の4名であった。そして、関西におけるテレビ報道の課題を議論する際に、「あなたたち関西の放送ジャーナリズムにとっての《彼ら》は誰ですか」という問いに答えていただく形で、ジャーナリズムの現場の視点から議論しようと試みた。

このシンポジウムは、(財)放送文化基金からの昭和18年度研究助成を受けた研究「放送の多様性に関する研究」の一部であり、ローカル生活情報番組とローカルニュースの分析を通して、在阪局の夕方の時間帯における地域情報番組とローカルニュースにおける競争が地域の放送文化、および地域課題、生活課題の情報提供に関わって多様性を保障するのかを解明する課題のひとつとして開催された。

本稿では、できる限り内容を正確に記録しているが、細かいニュアンスと口調などは再現されていない。

発言記録

司会：黒田勇

はじめにこのシンポジウムの改めて主旨を説明しておきたい。関西の放送（報道）というものを、東京との対比で、あるいは情報バラエティとの対比で見たい。現在、同じような時間帯に同じようなニュースをやっている現状の中で、放送のジャーナリズムとは何か、現場の意見、責任、関西の放送とは何か、関西にとっての報道とは何か。

まず、それぞれの方に10分ずつくらい問題提起をしていただくが、その中で、「報道マンにとっての『彼ら』とは何なのだろう」「放送にとっての報道とは、また報道にとっての放送とは何なのだろうか」をお聞きしたい。

沢田隆三〈毎日放送 報道部〉

自分は編集長という立場で、どういうニュースを何分間流すのか、そして、順番、並べ、切り口などを決めている。

まず大枠の話として、ニュース番組は朝5時から翌朝2時30分までのTV放送時間の中で、

存在が薄まってきている。自局で言えば5:30から「朝ズバ」が8:30まであり、11:00から13:00までが「ピンポン」、14:00から「ちちんぷいぷい」が3時間50分ある。

これら約9時間の生の情報ワイド番組があり、その後でイブニングニュースが26分、それから18:10に「VOICE」が関西ローカルのニュース番組として40分ある。

情報ワイド番組もニュース志向が強く、ずっと同じテーマや内容が朝からずっと繰り返し放映され、それに対して夕方のニュースは現場からの報道としてどのような存在意義を出せるのかが課題である。例えば、「ピンポン」の中でニュース枠は30分間サンドイッチされてはさまっている。見ている側にとっては、境目や内容の違い、ニュースとは何かが分かりにくい。

関西ローカルニュースにとっての「『彼ら』とは何か」という問いに対しては、『東京キー局』だと答えたい。彼らは情報ワイド番組でも全国各地へ取材クルーを派遣する。それに対して地方のローカル局は人員も削減され、縮小傾向にある。その中で関西エリアだけが唯一対抗しうる取材力を自社で持っている。そこに関西局の存在意義があると考えている。

それからもう一つ、『自分のところのワイド番組』との関係がある。例えば「ちちんぷいぷい」はニュースやニュース的なものを扱うこともテーマで、ネットや新聞など他のメディアも取り入れ、自分たち独自の切り口を出している。そうしたやり方でニュースを扱う傾向が強まってきている。その中で、どう違いを出して言ったらいいのか。

情報番組やインターネットなど、情報の洪水の中で、「40分しかない放送時間」が持つ価値とは何か。独自の視点と問題意識を持ち、他が目を向けないものも拾い上げ、ニュースを発掘し掘り下げていく、第一ランナーとしてありたいと思っている。それをどう実践していったらいいのか?が課題であると思っている。

黒田 簡単にまとめると、『彼ら』とは東京キー局(報道+ワイドショー)であり、また自社のワイドショーである。それから独自の視点や問題意識を持っていくことが難しいが課題である、というようなことか。

安田武史〈ABCテレビ報道部〉

自分は入社18年ずっとTV報道の現場に立ってきた。同僚からは奇異の目で見られたりもしている。TVの報道というのは新聞記者とは違って、マジメという感じでもジャーナリストでもない。テレビマンという柔らかなイメージで捉えている。「ニュースステーシ

ョン」に憧れてこの仕事を選んだが、見ていたときの印象と実際の苦勞との間でギャップも感じている。

「あなたたちの敵は？」という質問に対して答えたい。

まずは、『他局』。夕方のニュース番組も横一線の並びの中で視聴率競争がある。

それから、『系列の東京キー局』。現在巨大化の一途をたどり、機材でも人数でもニュース番組に占める面積でも大きくなっている。ニュースと情報番組との垣根という問題もある。また何か事件が起こったとき、彼らは関西の地を荒らしに来る。それをいかに蹴散らすかという意識もある。

最後に、『自局の情報番組』。例えば自局は「ムーブ！」→「スーパーJチャンネル」→「NEWSゆう」という順番になっている。大きな事件や事故など、人々の関心をひくものは昼からじゃんじゃん流され、そして夕方も流す。その中で唯一ニュースとは、事実を把握し事実で語るものだと考えている。ただ見ている人には違いに気付かれない。そこをアピールする必要を感じている。

お上の発表をただ垂れ流すのではなく、いかに料理するかが各局の勝負である。差別化をいかに図るかについては不安もある。視聴者を裏切っているのではないかと。

ニュースとして何を選択するかによって、人々の話題に入っていく。

それから4つ目の敵としてインターネットという怪物をあげておく。ただ怪しい情報が多く、速報のみで情報の精査がない。捨て置いてもいいかな？という気もしている。

ニュースと情報番組のボーダーはかすんできているが、違いは歴然としてある。ニュースはうわさでは動かないが、情報番組はうわさの段階から情報を逐一追ってそれを番組にしていく。さらにそれにスタジオのコメンテーターが意見を述べ、視聴者は分かったような気になる。身近になっているということに、恐れを感じる。

ニュースは事実で固め、事実だけを追う。

視聴率競争の中で、張り番などのあり方なども含め、民放の「横並び主義」にも問題を感じる。鶏インフルエンザ事件の時、浅田農産の社長への高圧的な姿勢のことが思い起こされる。社長はあの時謝っていたが、誰に向かって謝っていたのか。もしかしたら、報道に向かって謝らせていたのではないかという自戒がある。その後、社長は自殺した。公務員や警察官の不祥事についても、電波を使って懲罰的になっている意識がある。

本来メディアとはもっと後ろめたさであるとか、自戒、引いた部分を持つべきではないか？他に気になる部分として、被害者感情を汲まないようなところ。いわゆるメディアスクラムの問題も考えなければならないと思う。

課題として、引くときは引く。攻撃的な姿勢だけではいけないと思っている。

黒田 自戒すべき点として引くときは引くということを上げられたが、大震災のときの共有経験が思い起こされる。あの時関西メディアは自分たちのこととして震災を語っていた。それは東京の姿勢とは対照的だった。

安田 たしかに東京に比べればマシであるのかもしれない。東京の局は、事実というよりはネタとして取材にくる。例えば彼らが関西に取材に来て、いつも帰り際に「大阪は怖いところですね」と捨て台詞的に言っていく。何故起こったのか？ 起こりえたのか？ 現場への愛に欠けているように感じている。

黒田 世間の正義を振りかざすという態度があることは確かだ。

橋本崇〈関西テレビ報道部〉

関西テレビには自局のワイドショーがない。(フリップを出しながら)「ANCHOR」のキャスターをしている山本浩之アナウンサーは、8年くらいバラエティをしていたのでその印象が強いかもしれないが、その前は10年くらいニュースキャスターをしていた。親しみやすさや分かりやすい口調から、この4月からもう一度ニュースの現場に立ってもらっている。

夕方6時は全国ネットのニュースをやり、その後関西ローカルのニュースをする流れがあるが、その前に各局どのような番組をやっているかという、「ちちんぷいぷい」「ムーブ!」「ミヤネ屋」といった情報番組である。

関西テレビは16:55から2時間ニュース番組を流すという編成をとっている。まず1時間関西のニュースをやり、全国、再び関西という流れになっている。

『彼ら』とは誰かという問いであるが、『東京の報道、ニュース制作』を想定している(ワイドショーではなく)。

現在東京では16:55から4局そろってニュース番組を流している。しかしその内容は、ある日を例にとるが、新庄、セレブの犬、箱根の秋、ラーメン、このような内容を新聞の番組表に書き、ニュースの中で流している。これを見て、番組を見てみようと思われるか？

これらを東京ローカルでやるのはいいが…。視聴率競争という点で、早い時間に視聴者の興味をひきつけようという意図があるのだろう。そして19時まで突っ走る。

こういった番組を全国で使ってもいいですよという誘いがあり、17時から見られる局は全国に結構ある。その中で関西はとっていない。そしてとっていないから、それで何の影響もないかといえ、さまざまに問題が発生する。例えば、17:55からの全国ニュースがおろそかになっている。なぜなら、17時の時点でいいニュースをやってしまうので、残り物として4分間すべきものを1分半しか流さないということもおこる。

例えば昼のニュースで今日注目の判決が出ますといってそれを特集して煽る。しかし夕方方のニュースを見てもどのような判決が出たかを放送していない。昼と夜とでプロデューサーが違うからだと言うが、フジテレビを見ている人には失礼でないか。「自分たちの番組さえよければいい」という考え方にまきこまれている。そのようにして作られた番組に振り回されている。

また、東京の視点のおかしさという問題がある。首都であるとして、上からの視点でものを見ている。地方＝田舎の面白さを拾ってきて、それを皆で見ましょうという姿勢。地方で大変なことが起こったら、東京で起こったらもっと大変だ、どんな被害が出るかシミュレートしてみようという。関西人といえば面白いことをいうというステレオタイプがあるので、例えば全国一斉駐車違反取締りがあったら、警官とのやりとりの面白さを期待する。

関西は、このところ確かに凶悪な事件事故が多く、この10年で6回トップになっている。大震災、O-157、神戸連続児童殺傷事件、和歌山毒物カレー事件、池田小児童殺傷事件、JR福知山線脱線事故とあった。

東京からの取材は、サイド取材やインタビューが多く、ピンポイントとしてすぐに帰るという特徴がある。だから本筋を追うことは関西にしかできないと考えている。

地元局は地元にはできない取材をするというところに存在意義がある。東京の局はおいしいシーンばかりを撮りたがるが、報道という点から考えると一面しか切り取っていない。関西は大きな事件事故に直面することが多く、そこで培われるものは多い。人と人とのつながりからの取材により内容を作り結論へと至る。その中で人権意識も作られる。

1年目から記者として働くことは、事件現場に直面して、報道すべきこと伝えるべきこととしてはいけないこと、考えることは多かった。

黒田 『彼ら』は東京の報道であるということだったが、やはり震災のとき、「東京でなくてよかった」という発言があった。これは日常化しているまなざしだと思う。

関西には事件事故が多いが、一方で東京の事件事故はナショナルなものとして処理され、

関東の特殊性として語られない。国家のものとして語られる。そのような側面があるのではないか。

春川正明〈読売テレビ報道部〉

現在報道部長として現場を離れていると言われたが「ニューススクランブル」では三ヶ月だけチーフプロデューサーをした。さあこれからというところでバトンを渡した。

夕方帯を改編するにあたり、全編をローカルニュースでやるという関西テレビの姿勢は素晴らしいと評価したのだが、ニュースでは視聴率が取れないと言われて採用されなかった。自局は延々火曜サスペンス劇場をやってきて、最後発であったのでよそとは違うことをしようと考え、MBSが柔らかい系情報番組、ABCがハード系情報番組、関西テレビがニュース番組をしていることも踏まえ、うちは完全なコラボとして混成チームを組んだ。制作と報道の本体からそれぞれ人を出し、よく言えば全社的、悪く言えば寄せ集めの集団になっている。長期戦略で考えているが、うまくいくかはまだ分からない部分がある。

東京キー局の力に対して、面と向かって歯向かえるのは大阪だけという構図はある。

私が東京の人と話していて指摘するのは、東京が現場を荒らしに来るという意識。東京は地元で現場を抱えていないでしょうという感覚。東京ローカルという発想がない。(東京のニュースは)ゼネラルニュース、ナショナルニュースだと思っている。現場に長くいて人間関係を築いてずっとやっていくという考えもない。ぱっとやってきて、ぱっと帰っていく。

例えば福知山線の脱線事故のとき、真夜中のニュース番組でマンションをライトアップしてくれと言われた。もちろん断ったが。阪神優勝のときも、道頓堀に飛び込む人を中継したいと言ってきたが、中継をしているから飛び込むのだという側面もあり、煽りたくなかった。結局、中継はしなかった。

長浜で起こった児童殺害事件のときも、被疑者の家を囲んでいて近くに被害者の家もあったのだが、そこに棺が帰ってくる場面があった。それは撮らないでおこうと決めていたが、東京の局は夜にライトを炊いて棺が自宅に戻る時にキャスターの顔出しをやりたいと言ってきた。「夕方(の番組)とは違うことをやりたい」という理由で。

在京・在阪の部長と弁護士会で会合をもったりする。その時、東京の人は報道の原則とはとか、知る権利とはという話をし、弁護士側は人権、取材を受ける人の心情を問題にする。話がかみ合っていないことを感じる。

相手は誰か?という問いだけでも、『一般の人々』であると思っている。それは視聴

者であり、取材を受けてもらえる人々である。だんだん彼らのメディアを見る目が厳しくなっている。時には敵意すら感じる。

JR事故のときもすごく苦情を言われた。現場近くの工場の上に各局カメラを置いて取材していたのだが、吸殻やゴミの散乱、その上誰かが屋根の上で用を足した。何を考えているのか？とすごく言われ、現場では新聞記者が胸倉をつかまれて殴られるということもあった。自分たちも同じことをやっているのではないかという危機意識はある。

黒田 小学生のころ、NHKの「事件記者」というドラマ番組を見ていた。藤岡琢也さんが大阪出身の記者をしていたのだが、冷静で知的なキャラクターで、関西といえば、あの頃はまだそういう見方をされていたのだなと。さらに、マスコミとは、まさに人権の擁護者、社会正義の側であると思われてきたが、90年代になって人権の敵と見られるようになった。それは一般市民の権利意識の高まりもあるだろうし、正しいことをしたい・言いたいという人々の欲求が期待の高いメディアに向かっているという面もあるだろう。

春川 一つ言い忘れていたが、「ウェークアップ」という番組を担当したことは面白かった。大阪発でどんなものが出せるのか？を考えた。

例えば小泉首相（当時）に対し、就任1年目で世の中が皆小泉を賞賛していた時に彼は本当にいいのかと言う問題提起をした。また、拉致問題であらゆる番組が拉致被害者の家族を出した時もあえて番組に出てもらわなかった。それは他でも見られるという理由もあり、核問題も大切だという理由もあった。しかしこれらに対してはお叱りも受けた。

議員などコメンテーターも大阪に来ると、放送は全国ネットで流れますよと言ってもリラックスして東京では喋らないことも喋るところがある。

黒田 東京に対するもう一つの視点、同じ議題に対しての（違う）まなざし。それを提供できるのは能力や規模から言っても関西の局だろう。

休憩

黒田 まとめると、我々報道にとっての『彼ら』とはといえば、関西から見た東京キー局は大きな存在で、それを言うことでなんとなく在阪局で（意見が）まとまってしまう。日本の放送文化の中で、もう一つの目を持ちたい、放送文化の多様性をそこに求めることは

簡単だが、現実には、それほど簡単ではなく、関西の内部で多様なジャーナリズムが可能なのか、そうした議論が必要となる。

報道の問題として、メディアスクラムのこともあがった。例としてJR脱線事故、カレー事件、池田小事件など。

東京の視点に対し、(出来事を) 関西なりの見方で料理する試みがあってもよい。ただそういった試みはどれも単発で長続きしない。大阪なりの発信をすることの難しさを感じる。

それから生活情報番組、ワイドショーとの関係をどうするか。それらの番組がいいか悪いかは別にして。ワイドショー的コードに報道が飲み込まれ、境目が分からなくなっているという一般の人々からの視点がある。ただそれについてはきちんとけじめをつけるという話もあり、コラボという話も出て意見が分かれた。

ではまず、ワイドショートの境目について話を伺いたい。

橋本 ワイドショーとニュースの違いって何だろうか? 会場に聞いてみたい。

会場から ワイドショーは芸能人などのコメンテーターが自由な意見を言って、視聴者に働きかけていく。

橋本 確かに、ニュースを題材にして、そこから波及することがワイドショー。でもそのニュースを誰が提供するのかというと、報道。つまり報道とは第一義的に、誰がいつどこで何をしたかを伝える。

ワイドショーは例えば新聞を読み上げて、「これってどうですかね?」と聞く。伝える手段の一つのパターンを作ったことは確か。境目の曖昧さという話では、ワイドショーの手法はたしかに視聴者に分かりやすい。

ニュースはそのいいところを取り入れようとし、ワイドショーはかつてはニュース性のないものばかりだったが、ニュースを題材にして今何が起きているかを伝えたほうが視聴者は見るということに気付き、互いに侵食しつつある。騒音おばさんの例もあったが…あれはニュースかな?

沢田 騒音おばさんはMBSのスクープだったということで発言したい。

「VOICE」の特集の中で逮捕される前に、住民の方からの困っているという訴えで取材

を始めた。ただそのときは逮捕前ということで顔にはモザイクをかけた。その時デスクとして言ったのは、(取材は) やってもいいけど、背景として警察に行っても役所に行っても取り上げてくれずマスコミに訴えたこと、これは誰にもある危険でどうやったら解決できるんだろう、警察や役所を動かす何か手はないのか。それから本人にきっちり話を聞くこと、直接インタビューをすることを言った。

そして第一報を流すと、本人があまりに個性が強い人なので、各社から一斉に素材をくださいと言ってきた。非常にTV的な(視聴率が取れる)素材だということで。このような場合の筋としてTBSに提供したが、一部分だけがクローズアップされて背景が抜け落ちるという状況になった。それに対しては苦々しく思っている、きれいごとっぽい…。

黒田 あれはTV文化の象徴的なものだったと思う。みんなが飛びついて、ワイドショーで拡大再生産が行われた。

また会場からの質問を聞いてみたいが。

会場から 少し前に幼稚園の入園拒否という話題があった。ワイドショーはそれに対して「かわいそう」ということで取り上げていたが、ワイドショートのニュースの差別化ということを考えた場合、あの背後には医療行為ができないという問題があったわけで、そのあたりをきちんと説明することで差別化がはかれないか。

橋本 ワイドショーが興味本位なのは確か。でもいい目の付け所もある。報道は一面を切り取る。何が問題になっているのか、どうしたら救えるのか、専門用語ではなく説明する必要があると思う。

ただ、ローカルニュースは20分から30分、限られた時間の中で何を何分ずつどういう順で伝えるか。視聴者に伝えたいこと、視聴者が見たいこと、どういう手法で、分かりやすくかつ詳しく伝えなければならない。

安田 先ほど「医療行為とは何か」という話が出たが、深い見方だと思う。「医療行為」というのは行政にとっては(入園を断る) いい言葉を見つけたという感覚だったはずだ。

各社にいろいろな見方があっていいと思う。その子の笑顔を映して情に訴える方法もある、保育園の断り方を取り上げる方法もある。テーマは何か、何がこの事件の構図を描いているのか。

学生さんが「ワイドショーは自由に言っている」と言ったが、ワイドショーとニュースの違いを考えた場合、ニュースには対立する二者について両論を併記すること、発言の裏取りを行うことが求められる。それゆえに分かりづらくもなっているし、すっぱり言い切れないところもある。

黒田 ABCはハード系だという話が出たが、「ムーブ！」などはニュースを見てその怒りをぶつけるワイドショーであるように感じる。

安田 「ムーブ！」については、全国区に通用する論客がそろっているという事情もあり、総務省レベルの中央の情報を持ってきて喋る。

僕らにはそれはできない。明日ははっきり言えるものを、今日（曖昧に）言うことはできない。そのあたりは割り切りであり、自分たちなりの誠意だと思っている。

コメンテーターが個人として責任を負った中での発言を、ニュースが拾う必要はない。

記者としては現場のVTRで判断してもらうということを考えている。

沢田 「ちちんぷいぷい」の中にはニュース枠があるが、そこに対してコメンテーターがコメントしてしまう。1つの言葉を5分10分かけて解説する。プロジェクターに映像ではなく文字を映し、コメンテーターが質問・解説する。これは分かりやすい。

それに対してニュースは映像主体であり、極力、アナウンサー、キャスターの喋りも削るようにしている。映像でしか伝わらないところはあると思う。映像主体という差別化をはかっている。

黒田 報道マンとして境目の曖昧さにあせりはないのか？それが放送にとっての報道とはという問いにもつながるが。それと、ワイドショー的TV文化の広がりに対してどう考えるか。

沢田 「ちちんぷいぷい」は一つの事実、ファクトを時間をかけて掘り起こすことはやらない。あらゆるメディアの中のリサーチャーとして、視聴者はどのニュースを欲しているかということを考えている。

それに対して情報発信の第一ランナーが報道である。映像がスクープになって社会を動かす、それは一つの理想だ。例えば大阪の裏金問題について、一ヶ月毎日カメラを出した。

それは他にはできない。映像でちゃんと証拠を出さないと役所は（罪を）認めない。

春川 ニュースとワイドショーを分けることは実情にあっているのだろうか？（ワイドショーの）「美味しいところどり」には、TV屋として悔しさはある。視聴者も現場も、ワイドショーは無茶苦茶で報道はきちんとしている・すべきというのは、ステレオタイプでもはや古いのかもしれない。

黒田 「コラボ」と「境界線をはっきり」というテーマで議論したが、次に、メディアスクラムの問題、事例についてフロアーに聞いてみたいが…出てこないようなので、こちらで。

橋本 関西では事件事故が沢山起こる。ゆえに、メディアスクラムの問題も真剣に考えている。

例えば事件で遺体が家に帰ってくる。それをフラッシュ、ライトを炊いて撮る。被害者の取材が一番悩むところである。10年ほど前までは、二重被害を恐れて、マスコミは行かないでおこうという意識があった。だから例えばわざと（被害者家族の）近くには寄らず、知り合いから写真を得るということをしていた。

それに対して、それでいいのかという疑問が出てきた。むしろ被害者に講演してもらうという考え方もある。

ただ池田小の事件であったことだが、ある被害者家族が語ったことでは、一番嫌だったのは朝いってらっしゃいと玄関から送り出した我が子を、報道陣がつめかけていたため、遺体を玄関から迎え入れられなかった。玄関から送り出した子は玄関から帰ってこさせなかったということだ。それに対していろいろ思うところあって、被害者報道への意識は変わった。

被害者は最近をよく語る。言いたいことがある、マスコミを使って発信していくという姿勢がある。

黒田 被害者については、社会的存在としての義務という考え方、次の被害や犯罪を起こさないために（語ってもらう）という考え方で、あえて出てきてもらうこともあるだろう。

マスコミは人権の擁護者たるべきだという考え方があるから批判も多いのだが、60年代以前はもっといい加減だった。つまり、今は社会的期待をおわされた結果、かえって叩か

れる側面もある。それに対して開き直りはしないのか？

安田 被害者と同じ目線か、社会的なことを優先するかという問題。

東京のクルーにはこの同じ目線という考え方はない。それに対して僕らはこの現場をずっと引きずっていく。そのためには辛いが説得する、それでも駄目なら引くこともある。東京のクルーによる人権無視については真っ向からはねつける。ただ、一方で押されてきてもいる。

会場から (TVはあまり見ていないがと断りつつ)。例えば秋田の連続児童死体遺棄事件ではメディアスクラムが問題化し、現場での話し合いで代表制という方法がとられたが、やはり駄目だった(効果がなかった)という話もある。

これらの例を踏まえて、現場で話し合う余地はあるのか？ということを知りたい。

春川 部長会レベルでメディアスクラムのことはよく話し合われる。実はこれについて大阪が一番遅れていた。全国各地には新聞、通信社、民放の協議会があって、メディアスクラムなどが起こればそこに話が持ち込まれる。大阪にはこの統一機関がなかったが、今年の春にできた。

ただし、一義的にはメディアスクラム対策は現場でやりましょうということになっている。例えば塾での殺傷事件では、現場での話し合いで上手くいった。

もしも現場で駄目だった場合は、記者クラブレベル→部長会レベル→民放連(東京キー局の)という順で話があがっていく。

秋田のケースが難しかったのは、被害者でありながら被疑者の可能性も高かったことで、そこでどうしても一線を引くことができなかった。

会場から 政治報道では(メディアスクラムを組んででも)もっとアグレッシブにやるべきではないか。矛先が間違っているという懸念がある。

黒田 大阪市や京都市の公務員の不正問題もそうだ。

春川 それがローカル局のあるべき姿だと思う。例えば前首相が北朝鮮に行くとき、25万トンの米を援助に持っていくというスクープを出した結果、同行取材を拒否されたケース

があった。これに対する反対キャンペーンを日本テレビはネット番組で繰り返し広げた。一方毎日放送は、これは報道の自由に関わる大きな問題だとして、ローカル放送で取り上げた。こういうことはもっとやっていかないといけない。

黒田 他の例として、外交やナショナルの問題を関西で料理して流すということについて。

湾岸戦争のときのフセインの会見について、東京局では、全国ネットで、これは大変なことになると言っていた。一方で、毎日放送の深夜ラジオでは、アラブの見方ができるエジプト人の留学研究者が出演して、もうすぐ戦争は終わるとフセインの言葉を解説した。そしてそのとおりになったが、こういった可能性について。

沢田 関西だからというより、権力の問題は本来身近な問題だ。東京が発信してしかるべきナショナルテーマだけれども、数字が取れないと彼らはいう。そこで、それは普遍的な問題として関西のテレビ局が継続してやっている。

例えば、朝日新聞や関西テレビは他に偽装雇用の問題も取り上げていた。日常、私たちの社会で埋もれている重大なテーマが東京から発信されない。では関西でやろう。そこに関西（だから）という意識はあまりない。

会場から 私は東京から来たのだが、メディア批判だけで話が進むのかなという疑問がある。

例えば北朝鮮のコメ援助については、スクープした夜に飯島秘書官からかなりの圧力をかけられたというメールがきた。それはおそらく他にも横のネットワークで連絡がいったはずだ。そして日本テレビのトップが対決姿勢をとったことで、表面化した。そういうことは他にもあったのではないか。

例えば高知の事例など、他に文句を言いながら大事なときに横の連携をしないということとはあった。

ある部分については一緒になって報じないといけないこともある。

権力の巧妙化という問題もあって、例えば小泉政権のワイドショー利用。小泉氏が退陣するときも報道局がドラマを作って流したが、ああいうことはいいのか。

ハードニュースの境界が曖昧になる中で、報道部が現状に追いついていない。

関西には政治経済の報道の弱さがあって、その分社会面をこねくり回すようなところがある。そのやり方が、少しオーディエンスの側から引いてしまう。大阪からもっと、被害

者との関係などに踏み込む姿勢を見せて欲しい。

沢田 横の展開で権力に対抗していくという話があったが、実際はメディア同士で足を引っ張っている側面もある。昨今の不祥事報道など、意趣返し的一面もあるのではないか。それが自分たちメディアとしての弱体化にもなっていないか。

黒田 いまやメディア同士が互いに監視しあうという大義名分のもとに、視聴率競争から足を引っ張り合う構図がある。

連携の必要性、これは東京とローカル同士にもいえることだ。

春川 横の連携はたしかに取れていない部分がある。

実際、他局のスクープは嫌がる風潮がある。アメリカなどだと〇〇のスクープとして、他の局も流したりするのだが。

MBSが同和問題の特番をしたことがあって、見逃したのだから見たいのでVHSを貸してくれないかと聞いたのだから、取材継続中なので貸せないと断られたことがある。

スクープしたほうは追いかけて欲しくないし、スクープされたほうは追いかけてたくないという心情がある。なんとかしないといけないという自戒がある。

橋本 独自ネタを追いかけてくれてありがとうという話をしたい。派遣社員として偽装する雇用法の問題について、ずっと取材をしていて時々報告を出すのだがどこも追随してくれない、現場に行っても他局がいないという状況が続いた。

そのうちに派遣会社が訴えられ、労働局が会見を開くとき、ようやく全社が来てくれた。そして翌日、全国的に報道された。

追いかけることは確かに悔しいが、追いかける必要性、社会性は感じる。

黒田 ここでまとめの意味を含めて、「放送にとっての報道とは?」「報道にとっての放送とは?」という話をお願いしたい。学生が就職するとき、TV局を志望する人間は(バラエティーなどの)制作をやりたいからで、報道がやりたい人間は新聞社に行くという構図がある。

春川 難しいが、一番楽しい仕事ではないかとも思う。日々やることが変わっていくし、

一番大切なところでもある。

TV報道はまだ確立していないが、それだけに可能性がある。

橋本 関西テレビの社員は560人で、そのうち100人くらいが報道。これは全体の約20%にあたる。

ニュースはそんなに広告収入にも結びつかない。ではお荷物か？というと、報道が放送局の芯であり、根底であり、よりどころ、支えている部分だと思う。

どの局を見るか？という時に、その信用を作っているのは報道、ニュース。

放送とは？という問いに対しては、自分の取材したこと、テーマ、やりたいことを実現できる場である。放送を使って皆さんにそれらを知ってもらう。自分自身を表現することができる。

安田 制作が作るバラエティやスポーツは、面白いが一方的で押し付け型である。それに対してニュースは堅苦しいと思われがちだが、実は市民の声を拾う一番近いところにいる。

役立つ情報をとこちらが心がけても、視聴者はラーメン番組を見てしまうという側面。提供を受ける人たちも賢い選択者になって欲しい。

沢田 報道に対して厳しい見方、マスコミ不信や不満も出てきて、それに対して非マスコミ型の市民ジャーナリズムということも言われている。

しかし例えばホリエモンが「情報選択は自分たちでやる」と言っていたが、そこにこそ自分たちの問題意識がある。吟味し選択しアウトプットすることにおいて、ニュースや情報のプロフェッショナルとしてやることのあるのではないか。

視聴者の信頼を得られるように、市民生活において頼りになるように、横との連携や問題意識の共有をすること、それは我々にとってもプラスになるはずだ。

黒田 全体の議論をまとめる時間がなくなったが、最後の議論で一つ追加したいことがある。在阪のテレビ局はたしかに報道のスタッフが多く、そのことも含めて、ドキュメンタリーの制作の質と量は在京のキー局や他のローカル局を圧倒していると思う。広い意味で報道の蓄積がこうした結果をもたらしているのではないか。

さて、受け手の立場からもう一言付け加えたい。ネットに情報が氾濫しているからこそ、情報の整理役としてマスコミの責任があると思う。一般の人々はいろいろな生活、仕事を

抱えており、あらゆる社会的情報の収集と解釈、整理に手がまわらない側面もある。そうした受け手・市民の代わりに、放送ジャーナリズムが選択者・整理役をやっているのだという意識はぜひとも必要ではないだろうか。

今回は全体として関西放送ジャーナリズムの概論のようになった。これからもまた、個々に細かい研究会を開いて話し合いを深めていきたい。

—2007.6.4受稿—